

の末は、維新に際して、明治政府の廢藩を
またずに藩をやめたことでも知られている。

この狭山において町史編纂がおこなわれ
ることを聞いてから、かなり久しい年月が
たっており、私共はその上梓の日を鶴首し
ていたのであるが、昨年、まず第二巻史料
編を刊行された。末永雅雄、井上薫、山口
之夫、福島雅藏の諸氏が編纂にあたられた
にふさわしいすぐれた史料集が世に送りだ
されたことを喜び、若干、内容を紹介した
いと考える。

本文の史料は二六五点、五一四頁、古代、
中世、近世、近代の三部にわけ、とくに史
料の豊富な近世については、総記、土地、
貢租、村政、戸口、水利、土木、産業、狭
山藩、狭山藩領、寺社、銘記の一二項にわ
かって、主要な史料を採録されている。こ
れらは、いずれも興味深いものであるが、
なかでも「中林家累代日記」（総記）は、
文明二年（明治十年）とあり、ここでは天正
十一年より収載されていて簡単な記述であ
るが注目すべきものが多い。明細帳は六カ
村のそれが収められ、内容は詳細である。
「村政」では、摂河泉地方に多発した村役
人不帰依一件文書が含まれ、「水利」「土

木」では狭山池関係の注目すべき史料があ
り、産業には菜種油絞業、天満青物市関係
のものがある。また「狭山藩」では税斂法
とある貢租収納に関する詳細な文書や狭山
藩公辺諸向手控、旧狭山藩記事書類などが
収められている。

したがって、本史料集は、近世における
最も先進的な商品生産地帯の情況を知る上
での重要な参考文献となるであろうし、ま
た狭山池用水の慣行や、畿内小藩としての
狭山藩藩政を研究するのに、すぐれた手が
かりを与えるものと考える。

なお、本書には、本文につづいて一〇七
項におよぶ図版が付け加えられている。こ
こに含まれた数百枚の写真は、いずれも鮮
明なものであり、考古学遺物、古文書、民
俗行事、産業資料、景観など、多種多方面
にわたっている。それは町の歴史をより身
近のものとしており、本書の特色としてあ
げることができよう。

関係者の御努力に敬意を表し、狭山町史
第一巻本文編の刊行の早からんことを期待
しつつ簡単な紹介の筆をおきたい。

（A5判本文五一四頁 図版一〇七 昭和四
十二年四月 狭山町刊）（脇田 修）

箕面市史 第一・二巻

北摂の中央に位置する箕面市は旧箕面
村・萱野村・豊川村・止々呂美村などを母
体として成立し、市域には膨大な史料を有
する応頂山勝尾寺があるところから、市史
の編纂が早くからのでまわっていた。昭和三
九年暮に古代・中世篇として第一巻がま
まり、昨年近世篇の第二巻が出された。

第一巻は第一章原始・古代の箕面のうち、
主として考古学的面を藤沢一夫氏、文献学
的面を末中哲夫氏が担当し、第二章中世の
箕面のうち勝尾寺文書を中心とした中世全
体の動きを戸田芳実氏、文化財の面を佐和
隆研・藤井直正・藤沢一夫諸氏が分担して
いる。原始・古代の遺跡・遺物については
箕面市域のものが網羅してあるほか、周辺
のそれについても関連的にとりあげられて
いるので、北摂全体の様子を知る上で便な
らしめている。三〇〇頁にのぼる中世の政
治・社会・経済史は、ほとんど勝尾寺文書
によっており、本巻の中心部分といってい
いだろう。同文書の豊富なことは記述に便
利である反面、とすれば史料にかたよ

って勝尾寺の歴史となるおそれがあるが、それとだけ避け、勝尾寺と周辺村落とを関連づけながらこの地域の中世の展開をあきらかにすることに成功している。また、中世の勝尾寺領が現市域のかんりの部分を占め、この山間寺院を中心としてこの地域の中世史が展開したことから考えれば、勝尾寺文書を中心にみていくこともまた当をえているといえよう。とりわけ興味深いのは、勝尾寺が地頭職をもった高山庄をめぐる勝尾寺と領家浄土寺門跡、在地領主高山氏などとの争いで、のちの戦国大名高山氏の成長過程も追及されている。中世の文化財としては、めずらしい八天之石蔵の勝遺構が詳細に紹介されており、貴重な調査報告といえよう。

第二巻は島田龍雄・末中哲夫・藤本篤ら諸氏が分担し、太閤検地から江戸幕府の倒壊までの政治・経済・文化にわたり、近世地方文書をたねんに駆使して記述されている。この巻では山林・水利や西国街道瀬川宿などにかんりの部分がさかれており、入会慣行・争論・交通制度などについて興味深い事実が多い。中世以来の寺領山林をめぐって、近世に抬頭してきた小農民たち

と寺院との間における山論は興味をそそる全体としていえば一巻と二巻との連結に必要な織豊政権成立にいたる戦国期の記述が若干弱くなっているが、それを望むのは史料的な制約を無視したくないものなだりであるうか。

箕面市ではひきつづいて目下史料篇刊行の準備が進められ、本年度中に史料篇の一以下一年一冊の目標で史料篇の二、三がまとめられ、その後には本篇の近・現代篇がつくられる予定である。勝尾寺文書については、かつて大阪府が計画し、第一巻を出したのみで刊行を中断したいきさつがあり、今度箕面市によって大規模にその業がなされることは、歴史学界に大きな貢献をなすものとして大いに期待される。

(A5判 第一巻五一四頁 昭和三十九年二月 第二巻五四九頁 昭和四十一年三月 箕面市刊)

(松尾 寿)

新修島根県史

史料篇

島根県——出雲、石見国といえは、原始の昔から、古代、中世、近世、近代を通じ

て、それぞれの時代の特質に応じて独自な役割をはたしてきた地方である。昭和五年『島根県史』が完成し、その歴史解明の基本文献として利用されてきたが、これを抜本的に大改訂する仕事は昭和三十五年いらい進められ、主幹田村清三郎、編集員中村一介(近代)、河井忠親(古代、近世)、勝田勝年(中世)諸氏によって編纂されていた史料篇六冊(古代中世・近世上下・近代上下)がこのほど完成し、多くの新史料と、研究者の利用しやすいような数々の配慮を加えられて、学界に提供されている。以下古代中世篇を中心に紹介しよう。

まず古代は、六国史、類聚国史以下諸史料・文書の島根県関係の抄録及び日御碕神社蔵の出雲国風土記全文(校訂加藤義成氏)を掲載する。中世は、千家、北島家、日御碕神社、鰐淵寺、雲樹寺をはじめ、出雲国五〇家、石見国三二家、隠岐四家及び萩藩関閥録など県外三件全一一七七通を収めている。これら文書は、一々例示するまでもなく、たんに北陽の一地方史にとどまるものでなく、ひろく中世の政治・経済・文化の根本史料として利用されてきたものが多数にのぼる。旧県史も、文書・記録を